

腕は高く上に上げており、手に錐を持つ。元帥は鳥口先で三眼を持つ。袖がない赤地あるいは緑地の鎧を着る。髪・眉・鼻・頬の色が真紅であり、背中に羽が伸び、皮膚が青色である。

神画下部の両側に、二人の武官装束の男性の脇侍がそれぞれ立っている。二人とも武官冠を冠り、鎧を着る。神画の背景として瑞雲と炎が描かれている。

### 第13項 大海幡神画に描かれる内容について (別冊・表14)

ミエンが伝承している神画の中で、「海幡」という神が描かれる神画は2種類ある。神画に描かれる内容によって区別するなら、「上刀梯」と呼ばれる刀の梯子を登る儀礼の場面などが描かれるのは「大海幡」神画であり、黒蛇に乗ると描かれたのは「海幡張趙二郎」神画であると考えられる。「大海幡」「海幡張趙二郎」という名称中に、いずれも「海幡」の二文字を使っており、しかも神画に描かれるこの二神の着ている服装や装束なども非常相似しているので、同じ種類の神だと推断する。

この二神に関して、藍山県書表師の馮栄軍氏から一つの興味深い話を得た。以下、その話の内容を述べる。

ある日、一人が山で二つの石が喧嘩しているのを見かけた。その人は喧嘩をやめるように説得したら、二つの石はすぐ喧嘩をやめ、一つの石がゴロゴロと山の頂上へ転がって行き、もう一つの石がゴロゴロと山から転がり河に落ちて行った。山の頂上へ行ったのは、上海幡となり、河に落ちたのは下海幡となる。

以上の話から、藍山県のミエンが考えている「海幡」という神は、山を登る特性を持つ「上海幡」及び水と関わりがある「下海幡」の区別がある。「上海幡」の山を登る特性は、「大海幡」神画に描かれる海幡神の刀梯を掴んで登る姿勢から強く現れている。よって、「大海幡」神画に描かれているのは、「上海幡」であろう。「下海幡」の水と関わりがある特性は、「海幡張趙二郎」神画に描かれる黒龍から見えるので<sup>45</sup>、「海幡張趙二郎」神画に描かれるのは「下海幡」であろう。ここでは、まず「大海幡」神画に描かれる内容の読み取りを行う。「海幡張趙二郎」神画の読み取りは「第15項 海幡張趙二郎神画に描かれる内容について」で行う。

「大海幡」という神画の呼称に関して、主に湖南省永州市藍山県で使われている呼称であり、また同地域の神画の上部には「大海番」という文字が書かれているのも確認できる。湖南省永州市江華瑶族自治县及び広西壮族自治区恭城瑶族自治县では、通常「海番」と書かれるが、タイ北部では「大堂海番」「大海翻」と書かれる。「海幡」の「幡」という文字の使用に関して、非常に自由に使われていると見られる。「番」の他には、同音異字の「幡」「幡」「翻」とも書かれる。この種類の神画には「黄幡(黄色の幡)」が描かれているため、本論では統一して「幡」字を使う。

大海幡神画全体の構図としては、大海幡は神画上部の中央に大きく描かれ、向かって神画の左

側と下部には刀の梯子を登る場面などが描かれている。

まず刀の梯子を登る場面から見て行きたい。向かって神画の左側に「雲台」と呼ばれる高い櫓のようなものが描かれ、とそこに掛けられた刀の梯子が描かれている。梯子は約24本の長い刀で交差させて組まれている。梯子の左側に竹葉が生えている竹竿が立たせており、その枝に黄色の細長い幡を掛けている。さらに、幡には「太上昊天闕陽傳大幡堂樹」(図2-14, 図4-14)、或いは「太上昊天闕陽田大幡堂樹」(図5-14)という文字が書かれる。

「雲台」の上には、一人或いは二人の祭司のような者が描かれている。彼らは赤色或いは藍色の袍を着、手に角笛や師棍などを持っている。

梯子に、二人の刀梯を登る者が描かれ、一人はあと少しで「雲台」の上に届くので、刀梯を掴み、下の登梯者を眺めている。下にいる者はまだ二段くらいしか登っておらず、両手で梯子を掴み、足先で慎重に刀の上を登っている。二人共赤色あるいは深緑色の袍を着、素足である。さらに、図2-14、図4-14、図5-14の下の登梯者の右手に角笛を持っていると見られる。

二人の登梯者とともに、大海幡も一緒に梯子を登っている。大海幡の両足は素足で、足首から膝まで白い布を巻く。右足は刀梯の中段あたりを踏み、右手は刀梯の最上段を掴み、左腕は内側に曲げて胸の前に置き、手に酒盃を持っている<sup>46</sup>。大海幡の服装に関して、図2-14、図4-14、図5-14は、藍地あるいは黒地の上着を着て赤い裳を穿くのが描かれる。図1-14と図3-14は、赤色の袍を着て肩に虎皮を掛けるのが描かれる。大海幡は冠を冠らず、額に赤色の縄を縛り付け、頭両側のこめかみのところに各一枚の符を挟んでいる。

向かって神画の下部の左側には、祭壇が描かれ、上には酒杯や酒壺が描かれている(図1-14)。祭壇の前に二人の男性が描かれており、彼らは両手に圭のようなものを持ち、跪いて礼拝の姿勢をとる(図1-14, 図3-14)。さらに祭壇の上部には、「文台<sup>47</sup>」というものが見える。そこには炎が描かれ、儀礼文書を燃やしていると現していると考えられる(図1-14, 図3-14)。

むかって祭壇の右側には、五六人の楽師がおり、チャルメラを吹いたり、笛を吹いたり、鑼鼓を鳴らしたりする様子として描かれている。

楽師たちの上部に、黒龍に乗っている上半身裸の男性が描かれ(図2-14, 図4-14, 図5-14)、あるいは馬に乗る役人が描かれている(図1-14, 図3-14)。神画の背景として瑞雲が描かれている。

#### 第14項 十殿神画に描かれる内容について(別冊・表15)

十殿神画は、十人の閻王及び地獄の風景が描かれる神画である。「十王とは冥界にあつて亡者の罪業の処断を司る十人の王、すなわち秦広王、初江王、宋帝王、五官王、閻魔王、變成王、太山王、平等王、都市王、五道転輪王を指す」という[津田徹英 1991: 51]。

十殿神画の最上部に、「拾殿右」という文字が記されている(図3-15)。神画上半部において、向かって右の下から右の上、そして神画の上、また神画の左の上から左の下までに、「一殿」から「十殿」まで十王が描かれている。十王とも帝王が冠る冕を冠り、袍を着、神画の中央を向

#### 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

くと描かれている。通常「一殿」から「十殿」まで書かれるが、具体的にどの王であるのかを明記されないが、図 9-15 のように丹念に十王の名称まで具体的に明記する神画も見られる。

十人の閻王が囲まれている神画上部にある空間と、神画の下半部には、幾つかの地獄の風景が描かれている。神画の一番下に描かれている「地獄門」から上まで順番で見て行きたい。

通常神画の一番下には、「地獄門」が描かれており、左右には馬頭と牛頭が立っている。またその両側に、上半身が裸の罪人の両手を引っ張って地獄に入れようとする獄卒の鬼が描かれている。

地獄の門の上部には、橋が描かれ、上には3名女性が描かれている。ここの橋は「奈何橋」と呼ばれる橋だと考える。まだその上には瑞雲で幾つの空間に分けられている。下から上まで見て行くと、向かって左側には鋭い刀の山があり、獄卒の鬼は罪人を刀の山の上に投げ、山に突き刺される罪人の血が山に満ち溢れる様子が描かれている。向かって右側には、獄卒の鬼は猛火に罪人を入れ、あるいは釜に入れようとする様子を描かれている。さらにその上部には、大きな釜が描かれ、獄卒の鬼は罪人を釜に入れて鉄の棒で刺し煮る様子を描かれている。その横には、獄卒の鬼は罪人を踏み臼で粉碎している様子が描かれている。またその横に、一人の獄卒は、刀を持ち、罪人の髪の毛を掴み、罪人を切る様子が描かれている。また、その上部には、獄卒の鬼は罪人を臼で粉碎している様子が描かれている。あるいは、二人の獄卒の鬼は鋸で罪人を切り裂く様子が描かれている。さらに、獄卒の鬼は秤で罪人の罪を測る様子が描かれている。さらに、大きな鏡が描かれている。鏡の横には、二人の役人が描かれており、彼らは罪人を鏡の前に立たせ、前世の罪を映している。

以上読み取りを行った複数の十殿神画の中には、図 1-15 が含まれていない。なぜ図 1-15 を取り除いたかというと、図 1-15 には、5人の閻王と地獄の様子が描かれており、本論で取り扱う図 1-15 以外の1点に十人の閻王をまとめて描く十殿神画と完全に異なるタイプのものだと判断したからである。顔新元は「洞庭湖南岸の祭祀絵画」中で「亡魂を済度する儀礼に用いられる〈大功德画〉の中で対になる〈左十王〉と〈右十王〉があり、2点の掛け軸の内、1点には5人の閻王と相応する地獄の様子が描かれる。祭壇に掛ける際に、左右互いに対応する。」と述べている[顔新元 1994: 24-36]。顔氏が言っている〈左十王〉〈右十王〉というタイプの十王を描く神画は、図 1-15 のタイプと同じであると考え。神画に描かれる神々の向き方向から、図 1-15 は〈右十王〉だと推断する。残念ながら、この神画の所有者の趙金付氏は、図 1-15 と対応する〈左十王〉を持っていない。

#### 第15項 海幡張趙二郎神画に描かれる内容について (別冊・表 16)

海幡張趙二郎神画は、また「龍樹海幡」「海番過海」「小堂海幡」などとも書かれる。祭司はこの神画を「海幡張趙二郎」と呼び、また儀礼文献にも同様な名称が記されているので、本論では、この名称を使って統一する。

神画全体の構図としては、中央に海幡張趙二郎が描かれ、下部の両側には各一人の従者が描か



れている。

海幡張趙二郎は向かって右を向き、黒龍に乗る姿勢となる。虎皮の肩掛けを掛け、赤色のズボンを穿く。素足で足首から膝まで縞模様の布を巻き、赤い紐で縛っている。右腕は内側に約90度曲げ、胸の前に置き、手に酒杯を持ち、左腕は高く上げ手訣を結ぶ。海幡張趙二郎の靴の片方は膝の前に、もう一つは大蛇の尻尾の先に被せて描かれている。

海幡張趙二郎が乗っている黒龍は、頭をもたげ、大きな目が上方を見る。額の中心に角を一本生やしている。口を大きく開き、真赤な舌を出し、上下の牙が見える。神画の上部の右側と、海幡張趙二郎の脚の下には、大きな球状のものが描かれている。球の周囲に炎が描かれていることから、火玉だと推察される。

神画の下部には、二人の馬に乗る武将姿の男性の従者が描かれる。向かって左側の武将は、主神の向きと同じく右を向く。右側の武将は、振り返り左側の武将を見ている。神画の背景として瑞雲が描かれている。

### 第16項 太尉神画に描かれる内容について(別冊・表17)

太尉神画は、「太位」「大位」「行象太尉」「大堂太尉」とも書かれる。時には神画に「太尉」と記されているのに、祭司は「太歳」と書く場合もある。儀礼文献に記されている神々の名称の中に、「太尉」という名称が多く使われているので、本論では、「太尉」を用いて統一する。

太尉神画の全体的な構図としては、神画の上部には、「太尉左」という文字が記され(図3-17)、中央部に太尉が大きく描かれ、太尉の後ろに一人の旗を持つ脇侍が配され、神画の下部に馬に乗る脇侍が描かれている。向かって図1-17の最上部の右側に銘文も書かれている。

太尉は、向かって体が左を向き、顔が正面を向く。通常武官の冠を冠り、身に赤色の袍を着、白馬に乗る姿勢として描かれる。時には紫がかった深赤色の袍を着、黄色の馬に乗ると描かれるのも見られる(図7-17-2)。右腕は高く上にあげ、手に長い剣を持っている。左腕は内に曲げ胸の前に置き、手に酒盃を持つ。腰には花模様の腰巻を巻き、脚には黒い長靴を履く。

太尉の後ろには、旗をかかげる男性の脇侍がいる。旗には「令」という文字を書かれる場合もある(図1-17)。神画の下部には、二人の馬に乗る脇侍が描かれている。時には3人或いは5人として描かれることもある。これら脇侍たちは、武官帽を冠り、武官の衣裳を着、手に剣或いは角笛などの法具を持っている。神画の背景としては瑞雲が描かれている。

### 第17項 三將軍神画に描かれる内容について(別冊・表18)

三將軍は即ち、道教神の上元唐將軍・唐文明、中元葛將軍・葛文慶、下元周將軍・周文剛であるという[王秋桂ほか1989:99-100]。

三將軍神画の構図としては、神画の最上部に「三將軍」の文字が書かれ(図1-18)、それから瑞雲で上部・中部・下部の三つの部分に分け、それぞれの空間に、各一人の將軍が描かれてい



## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

る。三人の将軍とも、兜を冠り、鎧を着る。あるいは武将の衣裳を着る。以下、上部の空間から下部の空間まで、各々の将軍の姿を見て行きたい。

上部に描かれている唐将軍は、向かって左を向く。右腕は高く上を上げ、手に剣を持っており、あるいは手訣を結ぶと描かれている。左腕は後方に出し、手に剣を持ち、あるいは小旗を持っている(図1-18)。

唐将軍の後ろには、雷公<sup>48</sup>が描かれている(図1-18)。雷公は右腕を高く上げ、斧を持ち、左腕は胸の前で曲げ手に錐<sup>きり</sup>を持ち、斧で錐を叩いているようにも見える。雷公の肌は青色で、髪と眉は赤色である。背中に羽根がついており、口先と両足を鶏のように描かれる。足元には4つの腕が描かれ、雷公はその中の二つを踏む、腕の下から猛烈な焰が噴き上がっている。

中部に描かれている葛将軍は、向かって左を向く。左手は指笛を吹くしぐさをする。右腕は高く上を上げ、手に刀を持つ(図1-18)。あるいは、箭を射るしぐさをする(図2-18)。或いは両手に剣を持ち、片手は胸の前に置き、もう一つの手は後方に出している(図2-18、図4-18)。

下部に描かれている周将軍は、葛将軍と同様の方向で。周将軍は指笛を吹くしぐさをするか、或いは箭を射る姿勢を作る(図1-18)。

三将軍神画に関して、Lemoine は、*Yao ceremonial paintings* の中で、三将軍神画はミエンの神画のセットの中でめったに見られないものであるという[Lemoine 1982: 123]。Lemoine の言うようにタイでは三将軍神画がめったに見られないものかもしれないが、しかし中国湖南省永州藍山県、江華瑶族自治县、広西壮族自治区恭城瑶族自治县のミエン地域では、祭司が所有する行師神画(太尉・海幡張趙二郎・三将軍・総壇)を構成する最も基本となる神画であるため、珍しいものではないと考える。

### 第18項 監斎大王神画に描かれる内容について(別冊・表19)

筆者の聞き書きによると、「監斎大王」という呼び方は、主に湖南省永州市藍山県と江華瑶族自治县のミエン地域で使われている。広西壮族自治区恭城瑶族自治县では、「監斎」のみ呼ぶが、「大王」の二文字が省略されている。この神画は、比較的に少ないため、本論で取り扱う神画の中には4点あり、その内容は以下のように紹介する。

神画全体的な構図としては、上部の中央に監斎大王が描かれ、下部には調理する場面が描かれる。

監斎大王は、黄色の虎に乗る姿勢で描かれており、武官の帽子を冠り、黒色の上着を着、赤色の裳を穿き、黒色の長靴を履く。両鬢の髪は犬耳のような形であり、頭部の両側に立っている。髭は鍾馗髭のように鬢まで続く。髪と髭の色は赤色である。監斎大王の左腕は内側に曲げ、手に金環を持っている。右腕は上に高く上げ、手に剣を持っている。また、監斎大王の下に長方形のテーブルが描かれており、向かってテーブルの左側に文書を持っている文官が立っており、右側に鞭を持っている武官がおり、中央にいる男性を殴る姿勢となる(図4-20、図6-20)。また、テーブル前に両手で餅を高く捧げる女性もいる(図4-20)。

神画の下部に、民族衣裳を着ている男女は調理している場面が生き生きと描かれている。長い杵を持って餅を搗く人、その餅を丸く縮まる人、竈の前で竹の管で火を吹く人、てんびん棒で水を運ぶ人、薪を切る人が描かれている。また左手に煙管を持ち、右手で傘を差す若い女性が描かれている(図1-20, 図2-20)。さらにこの女性の向かいには、左手に扇子を持ち、右肩に傘を担ぐ若い男性も描かれている(図1-20, 図2-20)。

### 第19項 総壇神画に描かれる内容について<sup>49</sup>

本論で取り扱う異なる過山系ヤオ族(ミエン)地域から収集してきた神画の中には、儒仏道そしてヤオ族の神々が一堂に描かれているとされる「衆神図」がある。この種の神画は総壇と呼ばれる。また、「行象総壇」「総壇七十二神」「行司官像」「壇」とも書かれる。本論では、統一して「総壇」という用語を使う。

総壇神画には、他の種類の神画に描かれる主神らも含めて約70余の神が描かれている。しかも上から下まで、神々の位により九つの階層に分けて描かれている。神画の構図としては、それぞれの階層の中央に主たる神を描き、左右両側の神々は中央に向かって拝謁する姿勢をとる。

総壇神画の一番上となる第1層には、長方形のテーブルが描かれ、そのテーブルのところに炎状の光背が配され三清(元始天尊・靈寶天尊・道德天尊)と、円形の光背が配される玉皇・聖主が描かれる。黒色の衣を着ている元始天尊は最も中央に位置し、元始天尊の前に三つの酒盃<sup>50</sup>が置かれている。元始天尊から見ると、左側は深い緑色の衣を着ている道德天尊であり、右側には紺色の衣を着ている靈寶天尊である。向かって三清の左右には、それぞれに黄色の衣を着る玉皇と黒色の服を着る聖主が描かれている<sup>51</sup>。玉皇と聖主とも、冕を冠り、両手を合わせて圭を持ち、左右の両側から中心を向き、中央にいる三清に拝謁する姿勢をとる。また、向かってテーブルの左右には、張天師と李天師だと推断される人物が描かれている(図1-19)<sup>52</sup>。

第2層と第3層の中央となる神は白衣の観音である<sup>53</sup>。向かって第2層の観音の肩の左右にあたる場所に若い女男が描かれ、観音の脇侍の玉女と金童であると考え(図1-19, 図4-19)。またその左右に名前の知らない神々が描かれている。それから、第3層には、兜を冠る将軍のような武将及び、冕を冠る神が多く描かれているので、おそらく神将と天帝たちではないかと推測する。

第4層の中央となるのは、盤古とされる三面六臂の神である<sup>54</sup>。6本の手のうちの2本に日と月を持ち、高く挙げる。またそのうちの他の2本は胸の前で組み、拝謁する姿勢を作る。またそのうちの他の2本に刀を持っている。この神の左右には刀を持つ兜を冠る将軍及び武将らが描かれている。

第5層の中央となるのは、「雲頭龍鳳三姐妹」だとされる3人の女性である<sup>55</sup>(図1-19)。その左右には、筆と文書を持っている判官だと思われる文官が描かれており、また両手で圭を持つ文官らも描かれている。

第6階層の中央となるのは、兜を冠る3人の将軍が描かれている。この三神は、唐・葛・周三

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

將軍であると考え。三神とも剣を縦に持っている。三將軍の両側には、馬に乗り、圭を持つ武官らが描かれている。

第7階層の中央となるのは、虎に乗り、赤色の衣を着、手に剣を持ち、太尉だと思われる神である<sup>56</sup>。太尉の両側には、それぞれに二人ずつの功曹だと思われる武官が描かれている<sup>57</sup>。その他には、馬に乗る武官らも描かれている。

第8階層の中央には、位牌状の物が描かれ、その中に香炉が描かれている。その左右には、6柱の元帥が描かれ、6神とも馬に乗っている。

第9層には、左から右まで、杖を持つ土地公、逆立ちをする張五郎、「犀牛皆上兵」「猛虎毒蛇兵」「麒麟獅子兵」だと思われ刀を持ち、牛・象・獅・虎・麒麟に乗る5武官が描かれている<sup>58</sup>。土地公に関して、土地婆と共に描かれる場合もある(図11-19)。また、土地公は中国式の家屋の底の下に立つと描かれる場合もある(図2-19, 図4-19, 図5-19, 図7-19, 図11-19)。儀礼で用いられる文献に土地公をまた「住宅土地」とも書かれる。神画に土地公の居るところに家屋を描くことは、土地公は「住宅」の土地神であることを現れているのではないかと考える。

総壇神画の複数の階層を用いて神々の階位を表すという構図の方法は、道教神仙系譜の『洞玄靈宝真靈位業図』と非常に類似している。よって、ミエンのこの種の神画の創作は、道教の『洞玄靈宝真靈位業図』の影響を受けていると考える。特に、総壇神画の第1層の中央の位に描かれる主神の元始天尊は、『洞玄靈宝真靈位業図』の第1層の中位に描かれる主神と完全に一致していることが見られる<sup>59</sup>。これによって、ミエンにとって、元始天尊は間違いなく最高神であることがはっきりと分かる。総壇神画に描かれる神々の階位から、ミエンは自らの信仰している神々に対する地位の高低の評価でもあり、彼らの信仰神の系譜を反映するイメージ図でもある。総壇神画の第1層から第9層まで、ミエンの信仰している神々の階級の区別を明確にし、彼らが意識している神の系譜を絵画という手段で表現していると言える。

### 第20項 その他の神画について

本項では、以上で分析した19種類の神画以外の神画に描かれる内容について紹介する。

#### 20-1. 禁齋<sup>60</sup> 神画に描かれる内容について

図7-26 神画は小サイズの神画である。神画所有者である祭司の趙乙昇氏によれば、この神画はどの神が描かれているのか不明であるため、実際の儀礼において用いられていないという。*Yao ceremonial paintings*の中で、「Kiem Tsei 禁齋」と呼ばれる神画に類似している。その神画には、ミエンの服装を着る女神は犠牲用の豚を屠るのを監督する場面が描かれており、また神画全体の構図と神画に描かれる内容の一部<sup>61</sup>は、趙乙昇氏が持っている図7-26の神画と相似する。よって、筆者が図7-26は「Kiem Tsei 禁齋」と同じ種類の神画だと判断し、本論では「禁齋」の名称を引用した[Lemoine 1982: 142-145]。



図7-26の構図としては、上下二つの部分に大きく分かれている。上部の中央には、ミエンの服装を着ている女神が描かれ、下部には調理する場面が描かれている。

女神の頭部に円環状の光背が配され、頭に赤色の頭巾をし、藍色の上着を着、黒色と赤色のスカートを穿き、座る姿勢となる。神画の上部は破損しているため、細部まで読み取ることはできない。

神画下部に描かれている調理の場面は、さらに上中下の三つの部分に分れている。上部には、黒色の服を着た二人の男性が杵を持って臼で餅を搗いている。中部の藍色の服を着た3人は、左から右へそれぞれに餅を丸めており、薪を肩に担いで運んでいる。下部には竈が描かれ、竈の前に藍色の服を着る人と、黒色の服を着る男性が立っている。その右側にてんびん棒を担いで水を運ぶ男性が描かれる。

以上の読み取りから、「禁斎」神画の構図及び神画に描かれる内容は、「監齋大王」神画の構図と神画に描かれる内容と非常に類似していることが分かる。Lemoine は、*Yao ceremonial paintings* の中で、通常「Kiem Tsei 禁斎」神画の上部にミエンの服装を着る女性が描かれるが、時には剣を振る男性が描かれることもあると述べている[Lemoine 1982: 142]。「監齋大王」神画の読み取りによって、Lemoine が言っている剣を振る男性は、「監齋大王」を指していると考ええる。「監齋大王」神画は「禁斎」神画の大きいサイズの男神版だと言えよう。

### 20-2. 庫官<sup>62</sup> 神画に描かれる内容について

本論の読み取る対象とする「庫官」神画は、全部で3点あり(図5-21, 図6-21, 図7-21)、比較的に珍しい神画の種類である。「庫官」神画には庫官の官庁内の様子などが描かれている。

神画の最上部に「庫官左」の文字が記されている(図6-21)。上部に長いテーブルが描かれ、その後ろに黒い冠を冠り、赤色の上着で、黄色(或いは赤色)の裳を穿く官員が立っている。この官員は「庫官」と推測する。「庫官」は左手でテーブル上に置いている文書を押さえ、右腕が内側に約120度曲げ、手に筆を握っている。向かってその左右には各一人の従者が立っており、右側の従者も「庫官」と同じように筆を握っている。

テーブルの前には、人物が跪いており、両腕が開いて手に書類のようなものを掲げ、「庫官」に何かを上奏している。向かってこの上奏者の左右には、それぞれ椅子に坐る一人の官員装束の者が描かれている。向かって左側の者は黒色(或いは藍色)の上着を着、赤色の裳を穿き、右腕は内側に曲げて腰部に置く。左腕は高く上げ、右側にいる官と話をかけている姿勢となる。右側の官は青緑色の上着を着、赤色の裳を穿き、左側にいる官を向き、話を聞く姿勢となる。

神画の中央の左右には、両面の壁が描かれている。そこは「庫官」の官庁に入る正門であると考えられる。正門のところに一人の役人と一人の従者が描かれている。

神画の下部には、庫に入れる貨物を点検している様子が描かれる。向かって左側にはテーブルが描かれ、テーブルの後ろに一人の役人が立っており、左手でテーブル上の紙を押さえ、右腕は内側に曲げ、手に筆を握り、運んできた貨物を記入している。右側に二人の従者と大きな箱が描

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

かれ、従者は左側にいる役者を向き、確認できた貨物を報告する姿勢となる。神画の最下部には、貨物は担ぐ者、貨物を運ぶ馬を1匹引いている者が描かれる。

### 20-3. 王姥<sup>63</sup> 神画に描かれる内容について

ミエンの祭司によれば、「王姥」神画は、またの名を「王姆娘娘」神画ともいう。この種類の神画に関して、筆者は湖南省永州市藍山県と江華瑶族自治县で未だ見たことがない。主に広西壮族自治区恭城瑶族自治县地域で用いられている神画である。ミエンの儀礼神画の中には、女神を主神として神画に描いているのは非常に珍しい。筆者の集めた資料の中に、この種類の神画は2点(図6-22, 図7-22)あり、神画に描かれる内容は次のようである。

王姥神画の構図としては、中央に王姥が大きく描かれ、王姥の後ろには一人の女官がおり、神画の下部には3人の武将の装束をしている男性の脇侍が描かれている。また、図6-22の最上部には「王姥右」の文字が書かれているのも見られる。

王姥は向かって右を向き、花模様の上着を着、スカートを穿き、若々しく微笑んで瑞雲の上に乗る姿勢となる。左腕は内側に曲げ、手には笏を持ち(図7-22)、或いは瓢箪状の団扇を持つ(図6-22)。右腕は内側に曲げ、手は手訣を結ぶ。「雲髻」という雲型のまげに結び、花や簪をつけている。

王姥の後ろには、瑞雲に乗る一人の女官がおり、手には華蓋を持ち(図6-22)、或いは幡を持っている(図7-22)。下部に描かれる3人の武将は、雲に乗り、前を向いて描かれている。3人もと鎧を着、手に剣を持って高く上げ、防御する姿勢となる。

### 20-4. 四府功曹<sup>64</sup> 神画に描かれる内容について

四府功曹神画には、天府・地府・水府・陽間の4人の功曹が描かれているため、また「天地水陽」神画とも称されている<sup>65</sup>。この神画は、1対2点であり、祭壇に掛ける際に向かって左右並列して掛けるため、本論では「四府功曹・左」と「四府功曹・右」の名称を使って区別する。四府功曹神画のいずれの1点には、必ずどの功曹が描かれると決まっていない。4人の功曹はそれぞれの功曹であるのかを区別するのは、「献府歌<sup>66</sup>」という題目の記述に詳しく記されているので、以下ではまずその歌の内容を紹介する。

#### 「献府歌」

天府功曹騎何様	天府功曹は何に乗る。
地府功曹騎何兒	地府功曹は何に乗る。
陽府功曹騎何馬	陽府功曹は何馬に乗る。
水府功曹騎何龍	水府功曹は何龍に乗る。
天府功曹騎白鶴	天府功曹は白鶴に乗る。

#### 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

地府功曹騎虎兒	地府功曹は虎に乗る。
陽界功曹騎白馬	陽界功曹は白馬に乗る。
水府功曹騎黄龍	水府功曹は黄龍に乗る。
四府功曹騎四様	四府の功曹は4種類の動物に乗り、
飛雲走馬入壇前	速やかに祭壇の前に来臨する。

<後略>

「献府歌」に記された内容から、「天府功曹騎白鶴」天府功曹は白鶴に乗り、「地府功曹騎虎兒」地府功曹は虎に乗り、「陽界功曹騎白馬」陽間功曹は白馬に乗り、「水府功曹騎黄龍」水府功曹は黄龍に乗るという特徴がはっきりと分かる。以下、広西壮族自治区恭城瑶族自治县とタイ北部のミエン村の四府功曹神画に描かれる内容の詳細を述べる。

功曹神画の構図は、1点の神画に二人の功曹が上下に配置して描かれる。

広西壮族自治区恭城瑶族自治县の四府功曹神画は、左右2点の神画に描かれる4人の功曹が中央を向き、左右対象となっている。四府功曹・左(図 7-24-1)の上下には、それぞれ虎に乗る地府功曹と龍に乗る水府功曹を描かれる。地府功曹は、赤色の袍を着、左腕は前へ高く上げ、手に一巻きの文書を持ち、前方に差し出しながら急ぎ走る姿勢となる。水府功曹は、藍色の袍を着、左腕は前へ高く上げ、手に一巻の文書を持ち、同様の姿勢をとっている。右腕は高く上げ、手に刀を持つ。四府功曹・右(図 7-24-2)の上下に、それぞれ白鶴に乗る天府功曹と白馬に乗る陽間功曹が描かれる。天府功曹は、藍色の上着を着、赤色の裳を穿き、右腕は前へ高く上げ、手に一巻の文書を持ち、前へ高く上げ、地府水府と同様の姿勢である。陽間功曹は、赤色の上着を着、黄色の裳を穿き、右腕は前へ高く上げ、手に一巻きの文書を持って同じく差し出す姿で描かれている。左腕は体の後ろに出し、手に剣を持つ。

タイ北部ナーン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村の四府功曹神画の全体的な構図は、恭城瑶族自治县の四府功曹神画と同じであるが、神画下部に描かれる功曹の顔の向きは、中央ではなく外側を向いている。四府功曹・左(図 9-24-1)の上下に、それぞれ白馬に乗る陽間功曹と虎に乗る地府功曹が描かれる。陽間功曹は、赤色の袍を着、左腕は内側に曲げ、手に文書を握る。右腕は体の後ろに出し、手に鎗を持つ。地府功曹は、黒色の上着を着、赤色の裳を穿き、右腕は前へ高く上げ、手に文書を持ち、差し出す姿である。四府功曹・右(図 9-24-2)の上下に、鳳凰に乗る天府功曹と黄龍に乗る水府功曹が描かれている。天府功曹は赤色の袍を着、両手で文書を持ち、前へ高く上げ、一つの大きな手に文書を進呈する姿勢となる。この大きな手は天の神の手であると考え。水府功曹は赤色の袍を着、左腕を前へ高く上げ、手に文書を持ち、前方に文書を差し出している。背景として、瑞雲が描かれ、四府功曹は雲の中で往来する様子を現している。



### まとめ

以上、湖南省永州市藍山県・湖南省永州市江華瑶族自治县・広西壮族自治区恭城瑶族自治县・タイ北部などの異なるミエン地域の11組の神画に描かれる内容の分析を通し、異なるミエン地域に用いられる複数の同種の神画に描かれる内容の異同を明らかにした。各種の神画に描かれる内容の異同点はそれぞれの項目の中で詳細に述べているので、ここでは重複していない。ここでは、11組の神画の共通点及び相違点について述べたい。

この11組の神画の最も大きな共通点は、異なるミエン地域においても必ず元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主・四府・張天師・李天師・海幡・十殿・海幡張趙二郎・太尉・総壇の13種類の神画と、趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥の内のいずれか2種類の神画を持っていると考えられる。また、異なる地域にわたる同じ種類の神画に描かれた基本的な内容や主神と脇侍らの特徴もほぼ同じであることが明確にした。このことから、異なる地域のミエンであっても、信仰している神々の体系は同様であると見られる。

相違点について、一部のミエン地域では、その地域しか見られない種類の神画を持っていると見られる。例えば、「王姥」という種類の神画は、広西壮族自治区恭城瑶族自治县のミエンがしかっていない神画である。家の先祖が描かれた神画は、タイ北部のミエンがしかっていない神画である。また「庫官」という種類の神画も、広西壮族自治区恭城瑶族自治县と、湖南省永州市江華瑶族自治县の最南端に位置する両岔河地域でしか見られない神画である。さらに太尉・海幡張趙二郎・総壇・三將軍の4種類の神画で構成した「行師」神画は、湖南省永州市藍山県・湖南省永州市江華瑶族自治县・広西壮族自治区恭城瑶族自治县の三つの地域のミエンがほとんどこの「行師」神画をセットとして持っているが、タイ北部のミエンでは同じように使っていない。このような相違点から、神画の地域的な特性が見えてくる。

### 第4節 神画に書かれる銘文について（別冊・表20）

表20に示したように、本論で取り扱う11組の神画資料の中には、銘文が書かれている神画が十数点はあると見られる。1組の神画の中には、大体1点或いは2点の銘文が書かれる神画が入っていることが分かる。また、銘文が書かれる神画は、主に元始天尊、太尉、海幡張趙二郎、総壇神画であると分かる。元始天尊神画は「三清兵馬」神画の内の1点である。それから太尉神画、海幡張趙二郎神画、総壇神画は「行師」神画の内の3点である。よって、神画はセット単位で制作されると推測する。本節では、銘文の分析から、神画の制作及び制作の目的を考察して行きたい。

#### 第1項 銘文内容の分析

通常銘文は神画の表に記されている。しかし、事例により銘文が長ければ神画の裏に記される

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

場合もある。本章の「第1節 分析に用いる神画資料について」では、既に各神画に記される銘文を紹介し、また日本語訳も付け加えてある。以下では、銘文をもう一度挙げるが<sup>67</sup>、日本語訳を重複して掲載しない。

### 元始天尊神画 (図 1-1)

<sup>(2)</sup> 福主信士盤法有合家合■/<sup>(3)</sup> 發心彩画功德三位神■供奉/<sup>(4)</sup> 惟願人發千丁糧進万石/<sup>(5)</sup> 丹青楊子蘭/<sup>(6)</sup> 于光緒二十年八月之日大吉

### 太歳<太尉>神画 (図 1-17)

<sup>(1)</sup> 今據大清天下湖南省直桂陽州藍山縣仙政鄉/<sup>(2)</sup> 信仁福主盤法祿夫妻/<sup>(3)</sup> 謫議發心得買神像一堂四軸言定■錢壹兩五分正以後伝與後人/<sup>(4)</sup> 子孫四方相請香火不斷馬脚不停香火通行萬事大吉福有所歸/<sup>(5)</sup> 丹青弟子臨武周国珍/<sup>(6)</sup> 道光九年廿八日開光大吉

### 海播張趙二郎神画 (図 2-16)

<sup>(1)</sup> 太清国湖永州府道州寧遠縣先進鄉大地名紅江源小地名■僚坪立宅居住/<sup>(2)</sup> 信仕福主盤法念合家眷等/<sup>(3) + (5)</sup> 自發誠心命請常寧縣清李功和李功貴作彩画神像四軸/<sup>(4)</sup> 福所歸子孫為記/<sup>(6)</sup> 皇上嘉慶十一年十月卅日開光大吉々良黃

### 海播張趙二郎神画 (図 3-16)

<sup>(2)</sup> 信士行教弟子趙法興妻趙氏合家/<sup>(3)</sup> 發心請匠彩画行壇功德四軸/<sup>(4)</sup> 子孫永遠十方応用■/<sup>(5)</sup> 常寧縣丹青楊画又兄弟■/<sup>(6)</sup> 皇清乾隆二十五年庚辰歲十一月二十一日

### 総壇神画 (図 3-19)

<sup>(3) + (5)</sup> 丹青請陵武周国金發売行像一堂銀錢一仟三百文/<sup>(4)</sup> 買進用保■<sup>(6)</sup> 嘉慶廿年五月初五日

### 元始天尊神画 (図 4-1)

<sup>(1)</sup> 今在下梅住居/<sup>(2)</sup> 信仕香主馮法全妻趙氏所生男合家眷等/<sup>(3)</sup> 發心彩画大堂一十式軸/<sup>(4)</sup> 日後家下人丁興旺五谷豐登香門大旺百事大吉子孫永遠為記福友所歸/<sup>(5)</sup> 丹青王家義画/<sup>(6)</sup> 道光十六年丙申十一月十七開光吉旦

### 元始天尊神画 (図 5-1)

因社會形勢■■下無法保留原有神像父親將画毀■/<sup>(3) + (5)</sup> 後于乙亥歲仲春月請得鐘山縣紅花鄉大營村丹青師父楊呈應到大田湾黃法靈家照底彩書滿堂聖像■■十七尊天橋一条承■家主黃法顯時值■■■幣■/<sup>(6)</sup> 于公元一千九百九十五年季春月吉日成工

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

### 元始天尊神画 (図 9-1)

<sup>(2)</sup>馮法官/<sup>(3)</sup>誠心敬請匠人彩畫神像大小堂十七張功德文銀二十九兩■六錢正/<sup>(4)</sup>從今以後神像有灵有聖、保福保佑家主人日興旺永平安無災無難喜洋洋人財兩旺年年進五谷豐登滿庫倉六畜牛馬滿山崗福寿双全滿家堂師門興旺利八方子孫千年萬代應用可也/<sup>(6)</sup>皇上民國五年丙辰歲七月匠人潘德源黃道日開筆大吉利也

### 元始天尊神画 (台北世界宗教博物館所蔵神画)

<sup>(6)</sup>大清道光貳拾陸年十一月初十/<sup>(2)</sup>家主李法案夫婦二姓/<sup>(3)</sup>誠心請到賓州丹青匠人黃元星黃元昌兄弟二人彩画滿堂神像一拾三幅/<sup>(4)</sup>典後祈飽和家人丁興旺人口平安十方相請南北來迎五谷香煙不斷馬脚不停/<sup>(3)</sup>資匠價銀肆兩正

### 元始天尊神画 (図 11-1)

<sup>(2)</sup>法財趙金財合家/<sup>(3)</sup>謫議誠心敬請彩画錦衣/<sup>(4)</sup>恭奉祖宗保佑家堂人丁興旺六畜成群庫滿金銀穀滿倉錢財牛馬滿山莊更招外處田壕宅兒孫為宰上朝堂/<sup>(6)</sup>皇上光緒三十三年歲次丙午■■■■■画■■月十二日開光吉利榮華貴/<sup>(3)</sup>請廣西省思恩府武侯縣永寧鄉大漁村潘■■画大小堂十張謝師紅銀貳拾兩六錢正/<sup>(4)</sup>匠保主人增福寿福祿齊天子連孫

以上挙げた 10 点の銘文は、それぞれの銘文に括弧で番号を付けたように、内容から六つの部分に分けられる。

(1)では、神画の制作を依頼する者の住所が示される。(2)では、夫妻或いは一家の代表である依頼者の法名が示される。(3)では、具体的に新たに制作を依頼した神画の点数、及び制作の費用が示される。(4)では、神々に対する祈願の内容が示される。(5)では、絵師の名前といった情報が示される。(6)では、神画が制作された日の日付、或いは神画の開光儀礼が行われた日付が示される。

## 第2項 銘文から見た神画の制作

前述したように、神画を制作に関わることは、銘文の番号(3)を付けたところにあたる。以下、元始天尊神画と太尉・海幡張趙二郎・総壇神画に書かれる銘文の(3)にあたる部分を取り上げてそれぞれ考察して行く。

### 2-1. 元始天尊神画に書かれる銘文の(3)にあたる内容

図 1-1: 発心彩画功德三位神 (3 柱の神) ■供奉

図 4-1: 発心彩画大堂 (大きなセット) 一十貳軸 (12 軸)

図 5-1: 後于乙亥歲仲春月請得鐘山縣紅花鄉大宮村丹清師父楊呈應到大田湾黃法靈家照底彩



## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

書満堂<sup>68</sup> 聖像■十七尊天橋一条(神画 17 点、天橋 1 点) 承■家主黄法顯時值■■■幣■

図 9-1: 誠心敬請匠人彩畫神像大小堂十七張(大小セットの神画 17 点) 功德文銀二十九兩  
■六錢正

台北世界宗教博物館所藏元始天尊神画: 誠心請到賓州丹青匠人黃元星黃元昌兄弟二人彩画  
満堂神像一拾三幅(神画 13 点)

図 11-1: 謫議誠心敬請彩画錦衣請広西省思恩府武侯県永寧郷大漁村潘■画大小堂十張(大  
小セットの神画 10 点) 謝師紅銀貳拾兩六錢正

以上では、図 1-1・図 4-1・図 4-1・図 5-1・図 9-1・図 11-1 と台北世界宗教博物館が所蔵する元始天尊神画に記される銘文の(3)にあたる内容を取り上げた。この部分の内容から、図 1-1 の元始天尊神画は 3 点 1 組として制作され、図 4-1・図 5-1 と台北世界宗教博物館所蔵の元始天尊神画は十数点 1 組として制作されたことが分かる。また、図 9-1 と図 11-1 は大小の神画セットをまとめて制作されたことが分かる。ここの十数点 1 組となる「大堂」或いは「満堂」の神画は、神画のセットである「三清兵馬」神画だと推断する。「小堂」は、恐らく「行師」神画を指しているかもしれない。

### 2-2. 太尉・海幡張趙二郎・総壇神画に書かれる銘文の(3)にあたる内容

太歳<太尉>(図 1-17): 謫議発心得買神像一堂四軸(神画 1 セット 4 軸) 言定■錢壹兩五分  
正以後伝與後人

海幡張趙二郎(図 2-16): 自発誠心命請常寧県清李功和李功貴作彩画神像四軸(神画 4 軸)

海幡張趙二郎(図 3-16): 発心請匠彩画行壇功德四軸(行師神画 4 軸)

総壇(図 3-19): 丹青請陵武周国金発売行像一堂(行師神画 1 セット) 銀錢一仟三百文

以上では、「行師」神画という神画のセットに属する太尉・海幡張趙二郎・総壇神画に記される銘文の(3)にあたる部分を取り上げた。この部分の内容から、太尉・海幡張趙二郎・総壇神画は、4 点 1 セット単位として制作されることが分かる。また、「行壇」「行像」の言葉は正に「行師」神画を表していると考えるので、銘文に記される 4 点の神画は間違いなく「行師」神画を指していると確信できる。

以上では、各神画に書かれる銘文の考察によって、神画を新たに制作される際に、セット単位として制作されることが明らかにした。

### 第3項 銘文から見た神々に対する祈願

神画に書かれる銘文には、神々に対する祈願があり、それは銘文の番号(4)を付けたところに

あたる。祈願文の長さはまちまちであるが、主に家の人々の平安を守ってくれるように、子孫が増えるように、豊作できるように、家畜が群になるように、福が来るように、財産が増えるように、という内容が記されている。神画を新たに制作することを通じ、神画に描かれる神々がもう一度綺麗に描かれたので、これは神々に喜ばせることであると考えられる。この際に神々に対して祈願すれば、きっと叶えると考えていることが見える。よって、これらの祈願は神画を新たに制作する真の目的だと考える。

本節では、神画に書かれる銘文の内容を分析し、特に銘文中の神画の制作及び祈願に関する部分も取り上げて見てきた。このような銘文は、単に神画の制作と関わる情報を示すばかりでなく、神画の開光儀礼を済んだ証、神々に対して願をかけた証であると考えられる。

### 第5節 神画に描かれる神々について

以上では、異なるミエン地域から収集した11組の神画に描かれる内容を詳細な読み取りを行った。読み取りによって、この11組28種類の神画には、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主・張天師・李天師・天府・地府・水府・陽間・王姥・大海幡・海幡張趙二郎・太尉・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥・監齋大王・禁齋・天府功曹・地府功曹・水府功曹・陽間功曹・十殿・家先などの神々が描かれていることが明らかとなった。神画に描かれることは、これらの神々がミエンの信仰している神の世界において高い位に立っていることを意味していると考えられる。

本節では、神画の読み取りを通して見た神々の区分する方法、神々の位、道教的な影響、過山系ヤオ族(ミエン)らしさについて述べていく。

#### 第1項 神画に描かれる神々の区分について

神画に描かれる内容の読み取りを通じ、一部の神の冠や衣服などのスタイルが同様であることに気づいた。神画に描かれる神々を簡単に見分けるために、以下では、区分することを試みる。

神画に描かれる神々の冠・服装・持物・乗物などの特徴から分析を行うと、三清・帝王・天師・神将・海幡・功曹・その他に分類できることが判明した。

三清は、御座に座しており、龍と瑞雲模様の袍を着る。髪は頭頂に結い上げ、金冠を冠る。神画において中央に位置し、その下部の左右に各一人の脇侍が控える。この類にあたる神々は、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊である。また、元始天尊は黒地の袍を着、靈寶天尊は緑地の袍を着、道德天尊は紺色地の袍を着るという出で立ちが特徴である。

帝王は、御座に座しており、冕を冠り、圭を持つ。この種類にあたる神々は、玉皇・聖主・天府・地府・水府・陽間・十殿である。玉皇と聖主神画において、玉皇と聖主は中央に位置し、その下部の左右に各一人の脇侍が控える。天府・地府・水府・陽間を描く神画は、対となるものである。1点にいずれの二神が描かれ、それぞれに神画の上部と下部に位置する。十殿神画におい

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

て、10柱の閻王と共に地獄の風景が描かれる。

天師は、立っており、八卦袍を着、髪冠を冠り、圭を持つ。神画において中央に位置し、下部に脇侍が控えてない。この類にあたる神々は、張天師・李天師である。

神将は、太尉・將軍・元帥に区分する。太尉は、武官の冠を冠り、白馬に乗り、赤色の袍を着、劍を持つ。將軍は、兜を冠り、鎧を着、馬に乗り、武器を持つ。元帥は武将の衣服を着、武器を持つ。この類にあたる神々は、太尉・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥である。

海幡は、冠を冠らず、額に赤色の縄を縛り付け、頭両側のこめかみのところに各1枚の符を挟む。虎皮の肩掛けを付け、胴着を着、赤色の裳、あるいは赤色のズボンを穿く。素足で、足首から膝まで白い布を巻く。海幡にあたる神々は、大海幡と海幡張趙二郎である。大海幡神画に刀梯を登る場面が描かれており、海幡張趙二郎神画には描かれていないので、簡単に見分ける。

功曹は、鶴・虎・馬・龍に乗り、手に文書を持って進呈する姿勢となる。功曹にあたる神々は、天府功曹・地府功曹・水府功曹・陽間功曹である。功曹を描く神画は、対となるものである。1点にいずれの二人の功曹が描かれ、それぞれに神画の上部と下部に位置する。

以上述べた神々の他には、今の段階において分類できない神々もあるので、「その他」の類に入れた。

表 21 神画に描かれている神々の区分表

区分	容姿の特徴		区分にあたる神々の名称
三清	御座に座しており、龍と瑞雲模様の袍を着る。髪は頭頂に結い上げ、金冠を冠る。		元始天尊※・靈寶天尊※・道德天尊※
帝王	御座に座しており、冕を冠り、圭を持つ。		玉皇※・聖主※・天府・地府・水府・陽間・十殿
天師	立っており、八卦袍を着、髪冠を冠り、圭を持つ。		張天師・李天師
神将	太尉	武官の冠を冠り、白馬に乗り、赤色の袍を着、劍を持つ。	太尉※・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥
	將軍	兜を冠り、鎧を着、馬に乗り、武器を持つ。	
	元帥	武将の衣服を着、武器を持つ。	
海幡	冠を冠らず、額に赤色の縄を縛り付け、頭両側のこめかみのところに各1枚の符を挟む。虎皮の肩掛けを付け、胴着を着、赤色の裳、あるいは赤色のズボンを穿く。素足で、足首から膝まで白い布を巻く。		大海幡・海幡張趙二郎※
功曹	鶴・虎・馬・龍に乗り、手に文書を持って進呈する。		天府功曹・地府功曹・水府功曹・陽間功曹
その他	分類以外の神々		王姥※・監齋大王・禁齋・家先

注：※は、神画の下部の左右に脇侍が描かれることを示す。



### 第2項 神画の読み取りから見た神々の位について

神画に描かれる神々及びその脇侍たちの顔の向きによって、その中の一部の神の位を推断することができる。

元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主神画に描かれる主神は、神画において中央に描かれ、顔は正面を向き、神画の下部の左右に各一人の脇侍が描かれている。このように描かれる神々は、顔を横向きにし、また脇侍を持っていない神々（張天師・李天師・天府・地府・水府・陽間・大海蟠・海蟠張趙二郎・太尉・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥・監齋大王など）より位が高い神であると推断できる。

それから、脇侍らの顔の向きを見ると、元始天尊の脇侍は左右の両側から真ん中を向き、靈寶天尊の脇侍は右から左を向き、道德天尊の脇侍は左から右を向、玉皇の脇侍は右から左を向き、聖主の脇侍は左から右を向くように描かれる。脇侍らの顔の向きによって、この5神の中で、元始天尊が最も中心的な神であり、最高位の神であると推断できる。その左に位置する靈寶天尊は第2位、その右に位置する道德天尊は第3位、また靈寶天尊の左に位置する玉皇は第4位、道德天尊の右に位置する聖主は第5位であると配列することができる。

この位の配列は、総壇神画からも見られる。本章の第3節「第20項 総壇神画に描かれる内容の異同」で述べたように、総壇神画には、上から下まで九つの位階に分けて描かれている。他の種類の神画に描かれる一部の神々は、この九つの位階のいずれかの位置に配置されている。総壇神画の最も上位だと思われる一番上となる第1の位階に、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主の5神が描かれ、その中央の位に元始天尊、左の位に靈寶天尊と玉皇、右の位に道德天尊と聖主が配置される。この配置から、過山系ヤオ族(ミエン)にとって三清である元始天尊・靈寶天尊・道德天尊は最も上位の神であり、その次は玉皇と聖主となる。さらに三清の中では、元始天尊の位が最も高いということがはっきりと見えるのである。総壇神画から見たこの5神の位は、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主神画に描かれるこの5神及び脇侍らの顔の向きによって推断した位と完全に一致している。

元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主の他には、総壇神画の第6位階の中央に上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍が配置され、第7階層の中央の位に太尉が配置され、第8階層の左右の位に鄧元帥などの6柱の元帥神が配置されることが見られる。総壇神画から、過山系ヤオ族(ミエン)が、自ら信仰している神々に対し、明確にその位階を区別していることが見られる。

### 第3項 神画の道教的な影響

ミエンは持っている神画に描かれる元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇などの神々とは、民間道教のパンテオンのエラルキーの最上段を構成するところの、道教の「十八主神」であることが判明したとされる[竹村 1981: 160-161]。過山系ヤオ族(ミエン)の儀礼神画に道教神を描くこ

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

とは、始めから道教の影響を受けていることを示していると考える。

本論で取り扱う11組の神画に描かれた、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・張天師・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥・十殿などの神々は、道教系の神であることが判明できる<sup>69</sup>。神画に描かれたこれらの神々の容貌・髪型・衣裳の様式なども、道教絵画の同様の名称を持つ神々と相似しているばかりでなく<sup>70</sup>、特に、湖南省永州市藍山県及び江華瑶族自治県のミエン地域の神画は、該当省の民間絵画の画風と非常に類似<sup>71</sup>していることから、ミエンの祭司が持つ儀礼神画は、道教の神画の様相を受け入れていると同時に、その地域の民間絵画からの影響もを受けていると考えられる。さらに、神画からは道教の閩山派及び梅山派の影響を受けていると見做される。本論で取り扱う神画の中には、閩山教の信仰神の王姥<sup>72</sup>が描かれる神画がある。また、大海幡神画に黄色の幡を付けた竹竿及び刀の梯子を登るシーンが描かれている。これは閩山教の「建幡伝度<sup>73</sup>」の際に行われる「上幡竹<sup>74</sup>」と「上刀梯<sup>75</sup>」という二つの儀礼を表していると考える。すなわち王姥神画の所持及び、大海幡神画に描かれている内容は、閩山教の影響を受けている証であろう。さらに、総壇神画(図1-19)の一番下となる階層に、梅山教の信仰神である張五郎<sup>76</sup>が描かれる点については、梅山教の影響によるものであると考える。ミエンなどの西南少数民族の宗教信仰において、梅山教や閩山教などの教派の名称が見られることから、道教と少数民族の宗教文化は互いに浸透しているのであるとされる[張澤洪 2010:140]。こうした点からミエン神画に描かれた梅山教と閩山教の神々は、ミエンの宗教文化と梅山教や閩山教が融合した結果であると言える。

また、神画の構図に注目すると、主神は中央に大きく描かれ、脇侍は下部の左右、あるいは主神の後ろに配置している点については、道教絵画の構図とほぼ一致している。特に注目したいのは、総壇神画の構図である。総壇神画の複数の階層を用いて神々の階位を表すという構図の方法は、道教神仙系譜の『洞玄靈寶真靈位業図』と非常に類似している。そうした点からも、過山系ヤオ族(ミエン)の神画は、道教の影響を大きく受けていると言える。

このように神画に描かれた神々、構図に注目するとミエンの儀礼神画は、ミエン自身の宗教文化のみによって描かれているのではなく、梅山教、閩山教、そして道教の影響を受けているのである。

### 第4項 神画から見た過山系ヤオ族(ミエン)の特色

過山系ヤオ族(ミエン)の伝承している儀礼神画は、道教の影響を受けている点については上記した。しかし、あくまでも影響を受けているのであり、道教の神画と同一のものではなく、ミエン自身の特色を持っている。

儀礼神画を見ると、直観的に感じられるのは、赤色が非常に多く使われている点が指摘できる。赤色は人間の気持ちを高めることで、注意を引きやすく、また中国古代において魔除けや吉祥などの意味を持っているとされる[黄遠ほか 2009:49]。このような儀礼神画は儀礼時に祭壇に掛けると、人目を非常に引き、荘厳な雰囲気を作ることができる。特に、元始天尊・靈寶天尊・

#### 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

道德天尊・玉皇・聖主の5神の背後に、深紅の大きな火焰状の光背が描かれる。赤色の運用及び大々的な表現手法を通し、この5神は、ミエンの奉ずる神々中において位と法力が高いことを表現していると考えられる。このような光背の描き方は、道教絵画や漢族の民間絵画や仏画などいづれも使われていない表現の手法であり、ミエンが作り出した絵画の独特の風格を持っているのである。

ミエンの儀礼神画には、道教神の他に、ミエンが独自に奉ずる神が描かれている。即ち、ミエンの祭司の祖とされる李天師、ミエンの祭司に術を伝えた人物とされる大海幡<sup>77</sup>、授法する祖師である太尉<sup>78</sup>、監斎、家先(家の先祖)などの神々である。ここで注目したいのは、この中の監斎と大海幡が描かれた神画である。

最もミエン的特色を持つ神画というならば、やはり監斎神画であろう。何故ならば、監斎神画は、ミエンの民族衣裳を着た数人の男女が描かれている。描写の内容は、竈の前で火吹き竹を使う人物、てんびん棒で水を運び、薪を切り、堅杵を持って餅を搗き、丸まるめ、供物とする餅を作っている場面が描写されている。描かれた人々は分担し、それぞれの異なる仕事をこなしている様子がよく表現されている。

大海幡神画には、上記したように、刀の梯子を登る「上刀梯」儀礼の場面が描かれている。「上刀梯」儀礼は、ミエンの度戒儀礼が行われる際に必ず行われる儀礼科目であり、受礼者が乗り越えなければならない試練の一つである。大海幡神画には、大海幡の他に、儀礼の場である雲台、そこに掛ける十二本の刀で作られた刀梯、刀梯を登る正装の受礼者、雲台の上に立つ人物などが描かれる。さらに、雲台の上に立つ人物は、角笛や師棍などの法具を持っているので、儀礼を行う祭司であると考えられる。雲台の下に跪く正装の受礼者、チャルメラを吹奏する者、ドラを鳴らす者などの内容が描かれ、「上刀梯」儀礼を行う場面を生き生きと描写している。各人の目線は刀梯を登る受礼者に集まり、儀礼に注目している様子がよく表現されている。

監斎と大海幡神画に描かれるように、ミエンの儀礼時の調理風景及び彼らが伝承している儀礼の内容を生き生きと絵画で表現することは、ミエン儀礼神画の代表的な特色であると考えられる<sup>79</sup>。

こうした神画に描かれた神々の持物からもミエン独自の特色が見えてくる。神画に描かれる内容の分析により、太尉や大海幡張趙二郎などの神画に描かれる主神及び脇侍らは、酒盃や法具の角笛を持って描かれることが見られる。酒盃はミエンの儀礼時に神に献ずる酒を入れる器として使われるだけでなく、茶油を入れて灯明にし、ミエンの通過儀礼「掛三灯」「度戒儀礼(掛十二盞大羅明月灯)」の際に掛ける灯りとして使われる。角笛は祭司が天門を開く「開天門」儀礼の際に吹く重要な法具であり、また祭司は天門を開くという最高レベルの呪法を行うことができる能力も示していると考えられる。すなわち、酒盃を持って描かれた神々は、祭司の師であることを象徴しており、角笛を持つと描かれるその神の脇侍らは、師に従う祭司自身を象徴していると考えられる。道教の神画では、元始天尊は丹丸(丸形の練薬)、靈寶天尊は如意、道德天尊は団扇、文官は圭、武官は様々な兵器を持つという特徴であるが、このような酒盃と角笛のような持物を描かれない。こうした点からもミエン儀礼神画自らの特色が見えてくる。

ミエンの儀礼神画を見る第一印象という、その画風が漫画のようで、絵師の能力によって作



画技術の優劣は大きな差が見受けられる。本論で取り扱う11組の神画資料の中には、タイ北部ナーン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村の神画(図9-1～図9-24-2)は、表情の気高さ、姿態の違い、神々の個性が鮮明に表現されている。そして人物の眉毛や髭の線は細やかに処理され、画家の極めて高度な作画技術を表している。しかし、湖南省永州市江華瑶族自治县両岔河村(図5-1～図5-21)、広西壮族自治区恭城瑶族自治县三江鄉洗脚嶺村(図7-1～図7-26)、広西壮族自治区恭城瑶族自治县三江鄉養牛坪(図8-1～図8-21)の神画は、比較的に稚拙であり、素人の絵師が描いたものと推断できる。また、異なるミエン地域における同種の神画に描かれる内容の読み取りから、同じ種類の神画に描かれた同一人物であっても衣裳の色は、完全に一致しないことが見いだされる。例えば、周知されているように、道教神の元始天尊は黒色の衣を着ている。そして、この衣裳の色についてはミエンの儀礼文献にも明記されている<sup>80</sup>。しかし、ミエン儀礼神画の元始天尊神画においては、黒色・赤色・灰色・深緑などの色が使われて描かれることが見られる(表1 元始天尊神画に描かれる内容の異同)。これら神画から読み取れる情報から、儀礼神画を描く絵師は、神画に描かれている神々のことや儀礼文献に記されていることなどに関して精通しているとは言えない。そして、絵師の作画技術が如何に下手であっても、描き間違えであっても、ミエンの宗教信仰及び神画の使用に何の影響も与えていない。こうした点から、ミエンの寛容性が見えてくる。

#### [注]

<sup>1</sup> Lemoine は、*Yao Ceremonial Paintings* の中で、タイの神画を種類毎に章を分け、神画に描かれている神々はどのような神であろうかについて考察し、神々の装束・姿勢・服装などについて紹介した[Lemoine 1982]。黄建福は、学位論文「盤ヤオ神像画研究-広西金秀県道江村古堡屯の盤ヤオ神像画を事例として」の中で、広西金秀県道江村古堡屯の神画(1セット)を事例として、神画に描かれている内容及び神画の一般的な特徴について述べていた[黄建福 2008: 18-42]。筆者は、学位論文「ヤオ族儀礼神画の研究-中国湖南省永州市藍山県匯源郷湘藍村を事例として」の中で、湘藍村に住む祭司の趙金付氏氏が所有する神画(1組)をトレースし、神画に描かれる内容を詳細に読み取った[譚静 2012]。

<sup>2</sup> この地図は、百度地図に手を入れて調査地の地名を加えたものである。<http://map.baidu.com/>

<sup>3</sup> 『道教文物 Cultural Artifacts of Taoism』1999 台北国立博物館

<sup>4</sup> 儀礼に用いられる神画は、必ず1セット単位として用いられる。儀礼を行う祭司の能力と分担する役割み合わせて「行師」神画あるいは「三清兵馬」神画を使用する。儀礼において神画はどのように用いられたのかについて、本論第6章第3節第2項「儀礼内容から見た神画の使用」で詳しく述べている。

<sup>5</sup> この神画の名称に関しては、2011年11月に筆者は聞き取り調査の際に、趙金付氏は「太歳」神画であるといった。しかし、神画の上部には「太尉」の字が書かれている。

<sup>6</sup> 天地水陽神画は、また四府功曹とも呼ぶ。神画に、天府、地府、水府、陽間の四人の功曹が描かれる。神画は1対となるものであり、1点の神画に、功曹が二人ずつ描かれている。

<sup>7</sup> 神奈川大学ヤオ族文化研究所所蔵資料である。写真番号: IMG\_8341～IMG\_8440 撮影者: 廣田律子。

<sup>8</sup> 中国では、1958年に人民公社の高級社を統合して農村に設けられた。公社組織は人民公社、生産大隊、生産隊からなる三級所有制をとっている。生産大隊は、生産隊より大きな公社組織である。[『中日大辞典』1968: 1545]

<sup>9</sup> 現地の書表師である。伝統儀礼の際に、儀礼文書を作成することを担当する人である。

#### 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

- 10 度戒儀礼は、宗教職能者としての最高位を得る儀礼である。趙金付氏によると、宗教職能者は、掛灯儀礼を経てから「行師」神画を所有することができ、度戒儀礼を経てから「三清兵馬」神画を所有することができるという。また、もしこのことを無視して神画を所有する場合は、必ず害を及ぼすという。
- 11 棒形の法具であり、先はとがっている鉄を付けている。
- 12 この地図は、百度地図に手を入れて調査地の地名を加えたものである。<http://map.baidu.com/>
- 13 盤王祭は、旧暦10月16日（盤王誕生日）に行われるヤオ族の祖先祭祀活動である。
- 14 ここの名称は、神画の裏面に記された名称の転写したものである。
- 15 左漢中 1994『湖南民間美術全集・民間絵画』43-51;161-164
- 16 ここの名称は、神画の裏面に記された名称の転写したものである。
- 17 ここの名称は、神画の上部、及び裏面に記された名称の転写したものである。
- 18 この地図は、百度地図に手を入れて調査地の地名を加えたものである。<http://map.baidu.com/>
- 19 ここの神画の名称は、主に裏面に記された名称の転写したものである。
- 20 1970年代前半、文化大革命のさなか中国で展開された、林彪と孔子を批判する運動のこと。孔子及び孔子が説いた儒教、そして儒教を復活させようとする者とされた林彪が激しい批判の矢面に立たされた。[矢吹晋 1989『文化大革命』講談社]
- 21 湖南省永州市藍山県の祭司の趙金付氏によれば、神画は兵馬の1種であるという。従って、他の祭司が持っている神画を自分の物にすることは、他人の持っている兵馬をもらうことである。もらった兵馬を自分の兵馬と合わせて一つにならなければならない。このために行われる儀礼は、「合兵合将道場」という。
- 22 神画の名称は、調査の際に聞き取ったものである。
- 23 調査の際に、太尉神画の撮影をしていなかったため、神画の写真データを提示することができない。
- 24 『道教文物・Cultural Artifacts of Taoism』1999 台北国立博物館
- 25 後藤真里 2004 南山大学人類学博物館 「ヤオ族の暮らし(1960年代後半～70年代)-上智大学西北タイ歴史・文化調査段移管資料について」『人類学博物館紀要 第22号 展示資料図録・家電製品と少数民族資料』11-14
- 26 神画のことを指していると考える。
- 27 光緒丙午年は、光緒32(1906)年である。記述の紀年は書き間違っていると考える。
- 28 紅銀は縁起がよいために使われている言葉であろう。
- 29 本論で取り扱う元帥神が描かれる神画は、把壇師(趙元帥)・馬元帥・王靈官・鄧元帥の4種類ある。この類の神画は、2点1対でなければならないが、1組の神画の中に何れか2種類揃えば良いのである。
- 30 <http://htq.minpaku.ac.jp/menu/database.html#outside> 標本資料目録データベース 国立民族学博物館 H0199302-H0199322
- 31 天地未だ形成しておらず、万物未だ生成していない。
- 32 限りがない。はてがない。盡きる所がない。[『大漢和辞典・巻七』1991:433]
- 33 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-15a。写真番号:IMG\_1676s。撮影者:廣田律子。
- 34 「祐(yòu)」字と「玉(yù)」字の中国語発音が近いので、「祐」字と「玉」字は同音異字かもしれない。
- 35 旒(リュウ)、皇帝の冠の前後に垂れる玉飾り。
- 36 *Yao ceremonial paintings* に載せている聖主神画写真番号は48、50、51、53である。[Lemoine 1982:66-67]
- 37 図9-6・図9-7と図11-6・図11-7神画の所屬地域に関して、本章第1節「分析に用いる神画資料について」の第9項「タイ東北部ヤオ族村神画」と第11項「南山大学文化人類学博物館(日本)所蔵西北タイヤオ族神画」を参照する。
- 38 子供ではないが、西遊記中の哪吒のような頭の上に二つに結び分けたまげをした装束である。
- 39 窪徳忠によれば、酆都北陰大帝は地獄の長官であるとする[窪 1996:207-209]。
- 40 Lemoine 1982:PL.148,PL.160[Lemoine 1982:98-102]
- 41 『中国古典文学大系』第8巻・『抱朴子・列仙伝・神仙伝・山海経』「第十四荒東経」1998 平凡社 497-499

- 42 明・万歴 21<1593>年に出版された胡文煥の『山海経図』に描かれる「夔」の図である。この『山海経図』は『全像山海経図比較・貳』に収録されている[『全像山海経図比較・貳』 2003: 127-198]。
- 43 趙元帥、即ち玄壇元帥趙公明は、現在でも財神として知らぬ者としてない神である[二階堂善弘 2006:200]。
- 44 『三教源流聖帝佛祖搜神大全』の「趙元帥」の項に、「金輪」を持って称され、西方金の象徴であると記されている[『三教源流聖帝佛祖搜神大全』 1989: 142]。
- 45 海幡張趙二郎が乗る「南蛇」という黒龍に関して、請聖書には「南蛇出世」という題目の記述がある(神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号: A30-a。写真番号: IMG\_3528。撮影者: 廣田律子。)。その内容は「斬髮底頭帶火車、為吾山上架龍車、修車家主監福主、大海中心是我家、天下幾人不見我、張召二郎到我家、聞説今朝有相請、南蛇焰臨下壇前<後略>」となる。記述中の「大海中心是我家(海の中心には我が家である。)」という字句から、南蛇は海に住んでおり、水との関わりを持っていると分かる。
- 46 刀梯を掴んで登る姿勢の他には、大海幡は神画の上部の中央に、黒龍に乗る姿勢と描かれる場合もある(図 9-14)。そこから、大海幡と海幡張趙二郎とを混同して同一神として扱うことが見られる。
- 47 「文台」は、儀礼文書を燃やす際に使う台である。その脚は、3本の棒を交差させて縛りつけられたものである。立たせられた脚の上に鉄の鍋を載せてから、「文台」が出来上がる。
- 48 かみなりさま。
- 49 総壇神画には、約 70 柱以上の神々描かれている。よって、他の神画と同じように、神画に描かれる内容を細分化して項目に分けて表で示すことが非常に難しい。この理由で、本論では、総壇神画に描かれる内容の異同を示す表を作らなかった。
- 50 図 3-19 には、酒盃ではなく、二つの白色のお椀と、丸い団子を盛った椀が描かれている。また、この神画の下部の中央に銘文が記されている。
- 51 図 11-19 に描かれる玉皇と聖主の場所は逆となる。
- 52 図 1-19 に描かれるこの二神の髪色・髪型・容貌は、神画に描かれる張天師と李天師に非常によく似ている。よって、筆者は、髪の毛が赤色の方は張天師であり、黒色の方は李天師だと推断する。
- 53 図 11-19 に、観音は第四層の中央に描かれている。
- 54 廣田律子 2011『中国民間祭祀芸能の研究』風響社 350 頁に総壇神画の第四層の中央に描かれる 6 本の腕を持つのは盤古であると指摘する。
- 55 廣田律子 2011『中国民間祭祀芸能の研究』風響社 350 頁には総壇神画の第五層の中央の円に描かれる 3 人の女性は「雲頭龍鳳三娘」であると指摘した。「雲頭龍鳳三娘」は、また総壇図の第 4 層の左側に描かれる場合もある(図 2-19, 図 4-19, 図 5-19)。図 11-19 には、第三層の中央の円に、3 人の女性ではなく、5 人の女性が描かれる。
- 56 この神の様子・姿勢・冠・服装・持物は、神画に描かれる太尉にそっくりである。よって、この神は太尉だと推断する。
- 57 手に文書を捧げるのは四府功曹の特徴である。(四府功曹の特徴について、本節の第 20 項の「20-4. 四府功曹神画に描かれる内容について」に詳述している。) よって、この 4 人の武官は天府功曹・地府功曹・水府功曹・陽間功曹だと推断する。
- 58 廣田律子 2011『中国民間祭祀芸能の研究』風響社 350 頁には総壇神画の最下層に描かれる虎・牛・象等に乗る 5 武將は五猖であると指摘する。
- 59 李劍楠 2014「道教神仙系譜『洞玄靈宝真靈位業図』について」『中国哲学論集』37 号 九州大学中国哲学研究会 20-57 頁 24 頁には、「洞玄靈宝真靈位業図」神仙系譜の構成について説明し、その第 1 層の中位の主神は上清派に崇拝される最高の神の元始天尊であると述べている。
- 60 儀礼神画に描かれる監齋大王は一体どのような神であろうか、不明である。『道教儀禮文書の歴史的研究』によれば、「監齋法師すなわち靈寶監齋大法師真君」という[丸山 2004: 231]。ここの監齋法師と儀礼神画に描かれる監齋大王は同一神であるかどうか未確認である。
- 61 内容の一部とは、「Kiem Tsei 禁齋」神画の上部に描かれる民族衣裳を着る女神・下部に描かれる竈・てんびん棒で水を運ぶ人などの内容を指す。
- 62 庫官は臺南の功德で極めて重要な紙銭を冥界に送る填庫科儀にかかわる神である[丸山 2004: 385]。
- 63 葉明生によれば、「王姥」は即ち「王母」とであるという。しかし、この「王母」は伝説の「西王母」ではなく、閩山教中の最高位の女神のことを指すと指摘している[葉明生ほか 2007: 368-375]。



- 64 功曹は、三清などの高位の神々に文書を届ける伝送の役割の神の一種である[丸山 2004 : 258]。
- 65 祭司の趙金付氏によれば、四府功曹神画は「天地水陽」とも呼び、即ち天府・地府・水府・陽間の4人の功曹であるという。「陽間」に関して、儀礼文献には「陽間」「陽府」「陽界」と書かれるのも見られる。本論では祭司の言い方に従い「陽間」を使う。
- 66 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号 : A-30a。写真番号 : IMG\_3457~IMG\_3458。撮影者 : 廣田律子。
- 67 ここで挙げられた銘文は、図 1-17-1 と図 7-22 を含まれていない。図 7-17-1 と図 7-22 に記される銘文は短すぎるため、分析の対象に適切ではないと判断したからである。
- 68 満は、いっぱいになるという意味である。満堂とは、数が多い神画のセットを指しているだろう。
- 69 野口鐵郎ほか 1996『道教事典』平河出版社 105, 206, 212, 243, 401, 408, 584, 612
- 70 大阪市立美術館 2009『道教の美術 TAOISM ART』テーマ展図録 読売新聞社
- 71 左漢中 1994『湖南民間美術全集 : 民間絵画』湖南美術出版社
- 72 葉明生 2004「道教閩山派与閩越神仙信仰考」『世界宗教研究』第3期 70-75 頁に、閩山教中の信仰される王母(王姥)、許九郎、徐甲、盤古仙師、張趙二郎、張五郎などの神々について詳述している。
- 73 葉明生 2012「建幡伝度 : 閩山派の伝承、整合与宣示」『第二届国际瑶族传统文化研讨会-资源与创意 会议论文集』15-38 「建幡伝度」は、また「伝度醮」「開戒壇醮儀」とも称され、中国南方各地の民間道教においてよく見られる内部の伝度奏職儀礼であるという。
- 74 幡を付けられた竹竿に登る儀礼である。
- 75 刀の梯子に登る儀礼である。
- 76 葉明生 2013「共生文化圈的巫道文化形態再探討-從張五郎信仰探討閩山教与梅山教關係」『湖南人文科技学院院』第3期 1-10 4-5 頁に、湖南省安化や懷化地域の梅山の道壇から見た張五郎の信仰について報告している。
- 77 廣田律子 2011『中国民間祭祀芸能の研究』風響社 352 頁に、廣田律子は、「宗教文献に記された神名や軸に描かれた神像からは道教からの影響を色濃く受けていると言えるが、長年にをかけて道教神が受容されミエンの独自の神体系が形成されている。三清神を最高神とし、太上老君・玉皇大帝・太歳・張天師・馬元帥・唐・葛・周三將軍等道壇に掛けられ祀られる神々との一致をみることができる。一方で張天師の対面に掛けられた李天師はミエンの宗教職能者の祖と考えられ、また海幡もミエン独自の法術を授ける守護神といえる。」と指摘している。
- 78 本論第5章の第2節「第1項『混沌歌』から見た神画に描かれる神々」で、「混沌歌」に記される太尉に関する記述の分析によって、太尉は法を伝授する祖師であることが判明した。
- 79 大海幡神画及び監齋神画に描かれているミエンの民俗文化を反映する、「刀梯」に登ること及び祭祀時の調理場面から、ミエンの祭祀活動に用いられる絵画の世俗化傾向が見えるとされる[左漢中 1994 : 43]。
- 80 拙稿 2014「南山大学人類学博物館の西北タイヤオ族資料の調査に関わって」神奈川大学歴史調査報告第17集『南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史文化調査団収集文献目録』神奈川大学歴史民俗資料学研究科 168-171 170 頁に、「混沌歌」という題目の記述を紹介し、元始天尊は「身着黑衣坐龍殿(黒色の衣を着、龍の宮殿に座る)」と描写している。

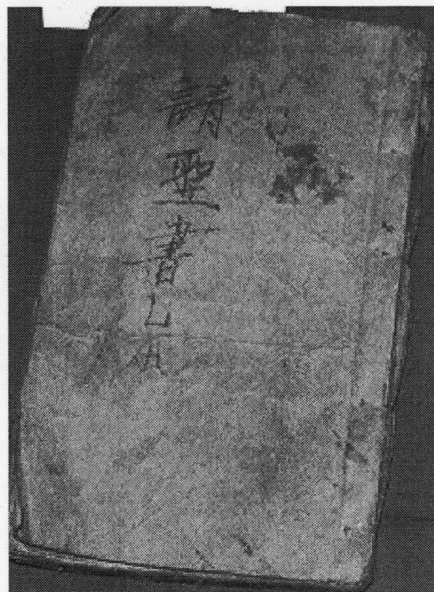
## 第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

ヤオ族の儀礼文献には、儀礼神画に描かれる神々の容貌や服飾などについて描写する記述が見られる。本章では、請聖書・賞光書というジャンルの儀礼文献に収められたこうした記述に注目し、その内容を分析することによって、儀礼文献に記述された神々の容貌や服飾などの特徴が儀礼神画に描かれていることと一致するかどうかについて明らかにする。

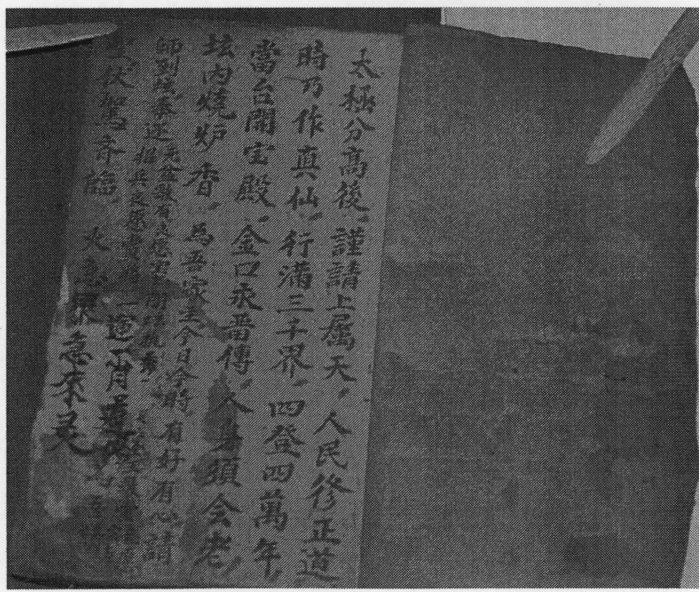
### 第1節 請聖書と賞光書について

ヤオ族が行う儀礼において、儀礼文献は不可欠なものである。儀礼で使用される儀礼文献には、通過儀礼に関する写本、儀礼に用いる文書類、神々を崇拝する神歌に関する写本、神々の呪文に関する写本、符、罡歩、手訣に関する写本、吉日を選ぶ暦、宗教職能者の受礼状況を記したもの等が含まれ、それらの内容から賞光書・伝度書・請聖書・意者書・歌堂書・超度書・暦書に分類できる[神奈川大学歴民調査報告第12集『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅰ』2011: iii]。そうした分類における請聖書と賞光書には、様々な神を描写する歌が多く見られる。本節では、この二つのジャンルの儀礼文献がどのようなものなのか、どんな儀礼に用いられ、またどのような内容が記述されているのかについて紹介する。

写真8・9で示したように、請聖書と賞光書は、いずれも手書きの写本であり、縦書き、毛筆で記されている。



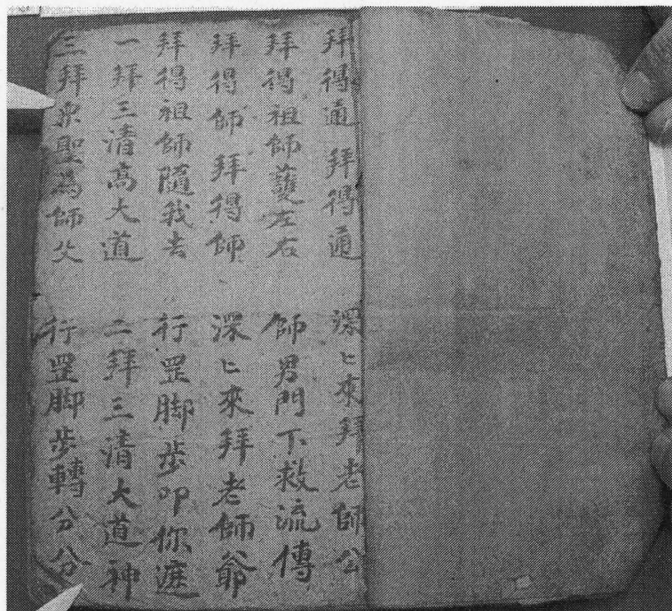
〈写真8〉 請聖書の表紙<sup>1</sup>



〈写真8-1〉 請聖書の第一頁



〈写真9 賞光書の表紙<sup>2)</sup>〉



〈写真9-1 賞光書の第一頁〉

張勁松によれば、請聖書には呪語が多く記されているため、「呪書」とも称されると述べ、また儀礼を担当する祭司たちが請聖儀礼<sup>3)</sup>を行う際に使用する主要な文献であるとする[張勁松ほか 2002: 215]。賞光書は、また「上光書」とも呼ばれる。その理由は上光儀礼<sup>4)</sup>を行う際に使用する儀礼文献であるからである。湖南省永州市藍山県過山系ヤオ族(ミエン)の度戒儀礼と還家願儀礼の程序から、それぞれの儀礼が行われる際に、これらの儀礼文献は祭司によって読誦されたことが確認できた<sup>5)</sup>。

2011年3月と2012年3月に、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科より発行された、神奈川大学歴民調査報告第12集・『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅰ』と神奈川大学歴民調査報告第14集・『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅱ』には、神奈川大学ヤオ族文化研究所所蔵の儀礼文献の目録が載せられている。そこから湖南省藍山県で行われた度戒儀礼と還家願儀礼の際に用いられた複数の請聖書(A-11、A-16b<Z-20>、A-18、A-22、A-31、A-32a、Z-18)と賞光書(A-19、A-30a、Z-16<Z-27>、Z-23、Z-24)が見られる。これらの請聖書・賞光書には、神画に描かれる神々を含め、様々な神について記述し、そして讃えるための呪文や歌などが収められている(別冊「付録」参照)。また、同じジャンルの文献資料は、2014年3月に出版された、神奈川大学歴民調査報告第17集・『南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史文化調査団収集文献目録』<sup>6)</sup>にも見られる。本論では、専ら湖南省永州市藍山県の祭司が持っている請聖書及び賞光書に収められている、儀礼神画に描かれる神々を描写する記述を主なる資料として取り扱うが、補足として上智大学西北タイ歴史文化調査団が収集した資料も取り扱っている。



## 第2節 儀礼文献に収められる神画に描かれた神々に関する記述

本節では、請聖書及び賞光書に収められている、儀礼神画に描かれていた元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、張天師、李天師、天府、地府、大海旛、海旛張趙二郎、三將軍、太尉などの神々を描写する呪文や歌などの資料を提示し、内容を明らかにするため翻訳を行い紹介したい。その理由として、これらの呪文や歌などの内容には、神画に描かれる神々の生年月日、誕生時刻、服装、持物などが記されているためである。本節では、これらの呪文や歌に記述された神々が、神画においてはどのように描写しているのか、記述と描写から見た神々の容貌や服飾などの特徴が一致するかどうかを明確にする。

以下に神画に描かれる主要な神々についての呪文や歌などの録文と翻訳を付し、分析を加える。録文文中の「■」は読解不明箇所である。

### 第1項 「混沌歌」から見た神画に描かれる神々

「混沌歌<sup>7)</sup>」は、1971～1972年に、上智大学西北タイ歴史文化調査団がタイ西北部に居住する過山系ヤオ族(ミエン)地域から収集した請聖書・賞光書のジャンルの儀礼文献に収められている歌である。この歌には、混沌の中から天地が開闢して様々な神が誕生するという内容が記されている。歌に記される神々の名称を見ると、儀礼神画にも描かれている神々は殆どが混沌から誕生してきたことが分かる。特に、「混沌歌」の内容には、神々の生年月日、誕生時刻などのことまでも記されているため、儀礼神画に描かれる神々を一層理解することができる非常に重要な文献資料であると考えられる。このような内容の歌は、未だ湖南省永州市藍山県の祭司が持っている請聖書及び賞光書の中には見られないので、補足資料として取り上げたい。その内容は次のように記述されている。

#### 「混沌歌」

混沌初開分天地	混沌 <sup>8)</sup> から初めて天と地が開き分れた。
何羅 <sup>9)</sup> 世上並無人	世の中に人がいない。
陰陽未分是朦朧	陰と陽が分れず朦朧としている。
並無日月照凡間	世間を照らす日と月もない。
寅卯二年洪水発	寅卯二年に洪水が発生した。
陰陽未到暗朦朧	陰と陽が分からず、暗くてはっきりと見えない。

盤古の天地開闢<sup>10)</sup>の神話伝説と同様に、「混沌歌」の内容から、ヤオ族の神話伝説でも混沌から天地が切り拓かれたことによって生成したことが見られる。文中の「混沌初開分天地」「何羅世上並無人」「陰陽未分是朦朧」「並無日月照凡間」「陰陽未到暗朦朧」というように、天地が切り拓かれていない時は、陰陽・人間・日・月がなく、いずれもはっきりとしない混沌の状態で

あった。

高皇置 <sup>11</sup> 天経立地	高皇は、天を設立し、地を立てる。
平皇出世置龍宮	平皇は出世し、龍宮 <sup>12</sup> を設置する。
盤王出世無衣着	盤王は出世し、着る衣が無く、
唐皇出世置衣縫	唐皇は出世し、衣裳を縫い作る。
置得人民無錢使	人民を作ったら、使う錢が持っていない。
出世唐皇来造錢	出世した唐皇は錢を造りにくる。
出世凡人無有火	出世した人間は火が無い。
帶男帶女暗中蔵	息子と娘を連れて暗い所で身を隠した。
出世皇置出竹火 <sup>13</sup>	出世した某皇は火を作る。
臨時置出火光明	臨時に火を作り出して光明になる。
上界置有陰陽聖	天上界に、陰・陽・神を設置する。
龍皇號法投経同 <sup>14</sup>	龍皇は法を大声で叫び、経典を入れた筒を投げる。
萬々聖主不敢話	神々は恐れて話すことができない。
當天取法教師童	天で法を撮って師童に教える。
紅藍赤黒無人着	紅色・藍色・赤色・黒色の服を着る人はいない。
草鞋踏破変成虫	草鞋を履き破れて虫になる。
天上日月置一聖	天上に、日と月を管理する神を設置する。
天車召轉月陰陽	天車を招いて月を巡り、陰と陽が分れる。
未分日月照天下	未だ世界を照らす日と月は分れていない。
置成日月照凡間	日と月を作り上げ、世間を照らす。

この段落は、宇宙の誕生について説明している。「高皇置天経立地」とは、高皇は天を設立し、地を立てた。「唐皇出世置衣縫」「出世唐皇来造錢」とは、唐皇は衣服と錢を作り出した。「出世皇置出竹火」とは、火を作り出した。さらに、「上界置有陰陽聖」とは、天上界において陰・陽・神を設置した。「天上日月置一聖」「置成日月照凡間」とは、日と月を設置し、光明を作り出した。その次に、神画に描かれる神々が登場する。

三寶出在清 <sup>15</sup> 雲内	三寶は青雲の内に生まれた
化身至在大清宮	化身は大清宮に至る。
年庚生在混沌歳	混沌の時に生まれる。
號為三寶大天尊	號は、三寶大天尊と称す。

文中の「三寶」は、三清の元始天尊・靈寶天尊・道德天尊を指していると考えられる。三神とも混沌の中から生まれ、「大清宮」という所において、三神のことを合わせて「三宝大天尊」と称され

る。その次に、元始天尊について詳しく記述される。

元始出世庚辰歳	元始は庚辰年に生まれる。
二月十五正寅中	二月十五日にちょうど寅の刻に生まれる。
勅令金盃頭上帯	勅令の金盃を頭に被る。
手拿宝鏡照天宮	手に宝鏡を持って天宮を照らす。
身着黒衣坐龍殿	身に黒色の衣を着て龍殿に座る。
脚踏蓮花 <sup>16</sup> 朶朶雲	脚は蓮の花のような雲を踏む。
得道法高龍虎伏	道を得て法が高くなり、龍と虎が伏す。
號為元始大天尊	號は元始大天尊と称す。

文中の「元始出世庚辰歳」「二月十五正寅中」により、元始天尊は庚辰年2月15日寅の刻(3-5時)に生まれたと分かる。また「勅令金盃頭上帯」「手拿宝鏡照天宮」「身着黒衣坐龍殿」「脚踏蓮花朶朶雲」から、元始天尊は、勅令金冠を冠り、手に宝鏡を持ち、黒色の衣を着、蓮の花のような瑞雲を踏むという特徴が読み取れる。「勅令金冠」は、元始天尊は勅令者であることを象徴しているだろう。さらに「得道法高龍虎伏」から、元始天尊は龍と虎が伏すほど法力が高いことが読み取れる。これらの字句から見た元始天尊の金冠を冠り、黒色の衣を着るという特徴は、神画に描かれる元始天尊の冠物及び着物の色と一致している。

元始天尊の次に、靈寶天尊のことが記述されている。

灵宝生在甲子歳	灵宝は甲子年に生まれる。
正月十五是寅時	正月十五日寅の刻である。
勅令金盃頭上戴	勅令の金盃は頭に冠る。
脚踏蓮花五色雲	脚は蓮の花の五色の雲を踏む。
身着藍衣在龍殿	藍色の衣を着て龍殿に居る。
太陽火扇扇開花	太陽のような火の扇子で扇いで花を咲かせる。
羅紗保 <sup>17</sup> 扇手中立	羅紗宝扇を手に縦に持つ。
號為道德大天尊	號は道德大天尊と為す。

文中の「灵宝生在甲子歳」「正月十五是寅時」から、靈寶天尊は甲子年1月15日寅の刻(3-5時)に生まれたと読み取れる。「勅令金盃頭上戴」「脚踏蓮花五色雲」「身着藍衣在龍殿」「羅紗保扇手中立」とあることから、靈寶天尊は、勅令金冠を冠り、蓮の花のような五色の瑞雲を踏み、藍色の衣を着、扇子を持つことが分かる。しかし、本論の第4章での神画に描かれた内容の読み取りによって、藍色系の服を着、扇子を持つという特徴を持っているのは道德天尊であり、靈寶天尊ではない。かつてこの段落の最後に「號為灵宝大天尊」を書くはずなのに、「號為道德大天尊」という字句が書かれていた。この記述のこの部分に関して、靈寶天尊と道德天尊の二神を混



## 第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

淆しているのではないかと考える。

その次には、玉皇のことが記されている。

玉皇身着黄衣段	玉皇は黄色の衣を着る。
生在己酉正月中	己酉年正月に生まれる。
十九寅時降下段	十九日寅の刻に生まれる。
手拿芽簡不离胸	手に圭を持って胸から離さない。
頭戴平天朱羅帽	頭に平天朱羅帽を冠る。
脚踏青雲朵朵紅	脚に青色や紅色の雲を踏む。
心中法令千般聖	心中の法令は千種あり、神聖である。
除邪現正玉皇公	邪悪を駆除して正義を正すのは玉皇である。

この段落の「生在己酉正月中」「十九寅時降下段」により、玉皇は己酉年1月19日寅の刻(3-5時)に生まれたことが読み取れる。「玉皇身着黄衣段」「手拿芽簡不离胸」「頭戴平天朱羅帽」「脚踏青雲朵朵紅」という字句から、玉皇は黄色の衣を着、手に圭を持って胸の前に置き、頭に冕を冠り、青色紅色の瑞雲を踏むといった特徴が分かる。ここから見た玉皇の衣の色、姿勢、持物、冠物は、神画に描かれた玉皇と一致する。また、文中の「心中法令千般聖」「除邪現正玉皇公」から、玉皇は法令を銘記し、邪鬼を滅ぼし、正義を正すという性格が強く現れている。

その次には、聖主のことが記されている。

聖主身着黒衣緞	聖主は黒色の衣を着る。
生在陰府丁卯中	陰府で丁卯年に生まれる。
七月十五降下殿	七月十五日に生まれる。
朝天芽簡不离胸	笏を天を向いて胸から離れない。
法令千般邪鬼伏	法令は千種あり、邪鬼を伏す。
號為聖主大天尊	號は聖主大天尊と為す。

聖主を描写する段落の「生在陰府丁卯中」「七月十五降下殿」の字句から、聖主は丁卯年7月15日に陰府(冥界)で生まれたと読み取れる。7月15日(旧暦)は盂蘭盆節である。この日に生まれることは、聖主が幽冥から誕生した性格を強調しているだろう。また、文中の「聖主身着黒衣緞」「朝天芽簡不离胸」により、聖主は黒色の衣を着、手に圭を持って胸の前に置く特徴が分かる。黒色の衣を着ることも幽冥を象徴していると考え。衣の色と圭を持つ姿勢は、神画に描かれる聖主と一致する。

その次に、天府、地府、陽間、水府が記されている。

天府身着紅衣緞	天府は紅色の衣を着る。
---------	-------------

生在戊卯五月中	戊卯年五月半ばに生まれる。
十五午時降下殿	十五日午の刻に生まれる。
朝天芽簡不离胸	笏を天を向いて胸から離れない。
地府身着衣黒緞	地府は黒色の衣を着る。
生在己卯六月中	己卯六月に生まれる。
陽間身着衣紅緞	陽間は赤色の衣を着る。
生在卯辰三月中	卯辰年三月に生まれる。
十五寅時降出世	十五日寅の刻に生まれる。
脚踏蓮花朵朵紅	脚に紅色の蓮の花を踏み。
水府身掛緑衣段	水府は緑色の衣を着る。
生在甲午九月中	甲午年九月半ばに生まれる。
初七午時降出世	七日午の刻に生まれる。
天平 <sup>18</sup> 金帶起雲雲	天平を冠り、金の帯を付け、雲から現れる。
朝天芽簡胸前立	笏を天を向いて胸の前に縦に持つ。
照下南山十八春	南山十八春を照らす(意味不明)。
都是老君教京 <sup>19</sup> 道	経典と道は全て老君から教えてもらった。
流傳度法供香門	世の中に広く伝わり、法を伝度し、祭壇に供える。

天府の部分から順番に説明していく。文中の「生在戊卯五月中」「十五午時降下殿」により、天府は戊卯年5月15日午の刻(11-13時)に生まれたと読み取れる。「天府身着衣紅緞」「朝天芽簡不离胸」の字句から、天府は、紅色の衣を着、圭を持って胸の前に置くという姿勢であると分かる。

それから、「地府身着衣黒緞」「生在己卯六月中」の字句から、地府は己卯年六月に生まれ、黒色の衣を着ると読み取れる。

その次は、陽間のことが記されている。「生在卯辰三月中」「十五寅時降出世」という字句から、陽間は卯辰年3月15日寅時(3-5時)に生まれたことが分かる。また、「陽間身着衣紅緞」「脚踏蓮花朵朵紅」により、陽間は赤色の衣を着、紅色の蓮の花を踏むと読み取れる。

陽間の後に、水府が出てくる。「生在甲午九月中」「初七午時降出世」の字句から、水府は甲午年9月7日午の刻(11-13時)に生まれたことが分かる。「水府身掛緑衣段」「天平金帶起雲雲」「朝天芽簡胸前立」の字句から、水府は緑色の服を着、帝王を象徴する冕を冠り、金の帯を付け、圭を持ち、瑞雲の中から現れる様子が見られる。

これらの天府、地府、陽間、水府の四神に関する描写から、四神の生年月日と生まれ時刻が分かるばかりでなく、四神を区別できる衣の色を把握することもできる。しかし、本論の第4章でこの四神が描かれる天府神画と地府神画に描かれる内容の分析によって、神画に描かれるこの四神の衣は多色であり、衣服の色で神の身分を判断するのは非常に困難である。しかも、四神とも同式の冕を冠り、同一の姿勢であるので、見分けるのは一層難しくなる。

## 第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

その次に、張天師に関することが記されている。

張天出世庚辰歳	張天は庚辰年に生まれる。
二月初九是午中	二月九日の真昼である。
一身便着紅衣緞	身に紅色の衣を着る。
八卦金衣色色紅	八卦の金衣を着て、色は紅色である。
手拿芽簡教法會	手に笏を持って法をできるように教える。
諸般法會尽通傳	諸々の法が全てでき、伝授する。
頭戴金冠所上坐	頭に金冠を冠り、所の上に座る。
脚踏羅鞋五色雲	脚は羅靴を履き、五色の雲を踏む。

文中の「張天出世庚辰歳」「二月初九是午中」の字句から、張天師は庚辰年2月9日の昼に生まれたことが読み取れる。また「一身便着紅衣緞」「八卦金衣色色紅」「手拿芽簡教法會」「頭戴金冠所上坐」「脚踏羅鞋五色雲」などの字句から、張天師は紅色地の八卦模様の衣を着、圭を持ち、金冠を冠り、羅靴を履き、瑞雲を踏むという姿が読み取れる。この様子は神画に描かれる張天師の姿と一致している。「諸般法會尽通傳」とは、張天師は諸々の法ができる法力が高い者であり、また法の伝授者の立場に立っていることが強く現れている。

その次は、李天師の描写がある。

李天身着黒衣緞	李天は身に黒色の衣を着る。
脚踏烏龜及青蛇	脚は亀及び青色の蛇を踏む。
除邪宝劍身邊立	邪鬼を駆除する宝剣を身の横に立てる。
北方壬癸是灵神	北方壬癸の靈神である。
戊子年間降出世	戊子年に生まれる。
五月十五是寅時	五月十五日寅の刻に生まれる。
出世無兄又無弟	生まれてから兄弟がいない。
投天教法上天宮	天に頼っていき、天宮へ行き、法を教える。

文中の「戊子年間降出世」「五月十五是寅時」により、李天師は戊子年5月15日寅の刻（3-5時）に生まれたことが分かる。「李天身着黒衣緞」「脚踏烏龜及青蛇」「除邪宝劍身邊立」の字句から、李天師は黒色の衣を着、亀及び青色の蛇を踏み、体の横に邪鬼を滅ぼす剣が立てられているという特徴が見えてくる。ここから見た李天師の衣服の色は、神画に描かれることと一致する。しかし、体の横に立てられる剣や亀と蛇を踏むことは、神画に描かれないパターンや描かれるものもある。

また、文中の「北方壬癸是灵神」とは、李天師は北を司る神であるという性格を強く現していると考えられる。北を司る神といえば、亀と蛇の絡み合った図像の玄武がイメージされる。文献記述



から見た李天師は玄武と同じように亀と蛇を持つことによって、李天師は玄武の化身ではないかと推断する。さらに、北を象徴する色は黒色であるが、黒色の衣を着る李天師は間違いなく北を司る神であると考えられる。

また、最後の「出世無兄又無弟」「投天教法上天宮」という字句から、李天師が神になる経緯が述べられ、また法術を教える神とする性格も見られる。

その次に、元帥神らが登場する。

把壇鄧師朝上坐	把壇鄧師は朝廷に座る。
手拿越 <sup>20</sup> 斧鎮乾坤	手に鉞斧を持って乾坤を鎮める。
身着紅衣斬邪鬼	紅色の衣を着て邪鬼を斬る。
都天 <sup>21</sup> 勅令顯神通	都天におり勅令し、神通を顯す。
雷霆 <sup>22</sup> 馬帥壇前立	雷霆馬元帥は祭壇の前に立てる。
出世小年十八春	生まれは、小年十八日の春である。
身上掛着紅衣甲	紅色の鎧を着る。
手拿玉斧顯神通	手に玉斧を持ち、神通を顯す。
雷霆關帥隨左右	雷霆關元帥は左右に従う。
身着金甲上天宮	金の鎧を着て天宮へ上がる。
玉帝勅封為上將	玉帝に上將として封じられる。
手拿鐵鎖把壇中	手に鉄の鎖を持って祭壇を守る。

この部分は、鄧元帥、馬元帥、關元帥について記されている。文中の「把壇鄧師朝上坐」「手拿越斧鎮乾坤」「身着紅衣斬邪鬼」の字句から、鄧元帥は鉞斧を持ち、紅色の衣を着ることが分かる。また、乾坤を鎮めることのできる勇猛な神であり、祭壇を守備し邪鬼を滅ぼす性格を持つ神であると読み取れる。儀礼神画から見た鄧元帥の持物と衣の色は、この記述の内容と一致している。

それから、馬元帥の記述を説明する。文中の「雷霆馬帥壇前立」「出世小年十八春」「身上掛着紅衣甲」「手拿玉斧顯神通」により、馬元帥は紅色の鎧を着、鉞斧を持ち、小年の18日の春に生まれたと読み取れる。中国の北部で小年とは主に旧暦の12月23日を指す。この記述中の小年に関して意味は不明である。神画に描かれる馬元帥は通常黄色の衣を着、鉞を持つと描かれるが、この記述から見た馬元帥の衣の色及び持物と完全に一致しない。

その次に、關元帥に関する記述である。文中の「雷霆關帥隨左右」の字句から、關元帥は鄧元帥あるいは馬元帥に従う神だと推断する。「身着金甲上天宮」「身着金甲上天宮」の字句から、關元帥は金色の鎧を着、鉄の鎖を持つという特徴が分かる。「玉帝勅封為上將」から、關元帥は玉帝（玉皇大帝）に任命された将官であることが読み取れる。

この三神の次に海旛神が記されている。ここの海旛神は大海旛であり、海旛張趙二郎ではない。